

情熱せいねん



国労西日本本部 青年部

情熱せいねん(国労西日本青年部

NEWS)

2008年8月29日発行

広島にて 平和のつどい開催

戦後 63 年目の夏を迎える。あれから日本は平和な国として反映しているが、過去の歴史を学び、かつて日本はどういう状況であったか、私たちは平和をどう考えたらよいのか。

8月6、7日の二日間、広島において第2回平和のつどいを開催し、平和の大切さを学んだ。

被爆建物めぐり

原爆のすさまじさをものがたり、その恐さを伝える被爆建物は原爆ドームをはじめ、爆心地から半径 5 km 以内に 93 件を残すのみとなっている。被害者をはじめ多くの市民、平和を願う人があの悲劇が二度と起こらないように、原爆の被害を伝えつつける目的で残したいと思い、守っている。



二日間に分けて旧中国軍管区司令部、旧本川国民学校、旧日本銀行広島支店、旧袋町国民学校、旧広島地方気象台を見学した。旧中国軍管区司令部は爆心から 790 メートル。当時、比治山高等女学校から生徒が動員されていた。原爆で 700 人余りの司令部職員と 67 人の生徒が死亡。建物はほぼ壊滅したが、半地下の通信室はかるうじて残った。爆風でめちゃくちゃになった室内から、当時通信業務にあたっていた二人の生徒によって被害の第一報が伝えられた。

被爆体験講話

当時 11 才で被爆したヨシオカさんは、「建物疎開に動員され、学級の半数が行くことになっていた。わたしは半数の代表としてジャンケンをして相手に勝った。相手のグループが建物疎開に行き作業中に亡くなった。そのことで学級の皆に申し訳ない気持ちでいっぱいになった。悪いのは戦争であり、人を平気で殺してしまうものという歴史を知った。これを話すことがジャンケンで負けた同級生を追悼することになると思っている。被害の後がなくなると事実を忘れて戦争を繰り返すかもしれない。忘れないためにも残さなければ。」と語った。



つどいの最後に

被爆した人や建物、慰霊碑などから発するメッセージは、「このような惨劇は二度と起こってほしくない。あの日の出来事を忘れさせないように語り続けたい」ということだろう。私たちは、ここで見たことを胸に留め、今度は自身がこのメッセージを受け継ぎ発信していかなければならない。

8月6日に広島を訪れ、各地で行われている慰霊式や平和行事に参加することも平和を守らせ、核廃絶への一歩になるはずだ。全世界が平和になることを祈りたい。